



©Shin Yamagishi

第199回定期演奏会 ～秋・愛・哀～

2023年9月15日（金）18：00開場 18：45開演

三井住友海上しらかわホール

指揮/藤岡幸夫

ブラームス：大学祝典序曲ハ短調Op.80

ブラームス：悲劇的序曲ニ短調Op.81

ヴォーン・ウィリアムズ：トマス・タリスの主題による幻想曲

ブラームス：交響曲第3番へ長調Op.90

本日の定期演奏会は、ドビュッシーが描く夢幻のまどろみを、ブラームスの深く美しい轟きが醒ますような、起伏も豊かなプログラムで始まります。前半でお聴きいただくピアノ協奏曲第1番では、この大作も深く弾きこみ続けて来た名匠・小山実稚恵の表現を堪能できることでしょう。

彼女のブラームスに満ちるのは、手ごたえ重い作品を十全に燃え上がらせる瑞々しいエネルギーだけではありません。繊細緻密な歌にもひらく深淵、そこに満ちる感情のさまざまな色…・精妙なコントロールで表現される音と時間の伽藍に、豊かなインスピレーションが降り宿る瞬間。

きっと、本日の演奏がブラームスを〈いまに生きる〉音楽として体験させてくれるだろうと愉しみにしつつ——次回定期のお勧めをする前に、（繋がりもあるので）小山さんの音楽のお話をもうひとつ。

◆ブラームスの生きた時代——その音を〈いまに生きる〉

先日、小山さんは新しいCDアルバム『モノローク』[ソニーミュージック]を出されたのですが、これはセントラル愛知響定期のブラームス・シリーズをお聴きの皆さまにも、ぜひお聴きいただきたい一枚です。

この新アルバム、あえて古いスタインウェイ・ピアノを弾いて録音されているのですが、実はこの楽器、ブラームスがまだ晩年の日々を過ごしていた1890年代に、ドイツのハンブルクで製造されたピアノなのです。

少し小型で、響きも独特の色あいとニュアンスをもった、不思議に惹きつけるピアノ——このブラームス時代から生きてきた楽器で、優しく近い小品たちが響き歌われてゆきます。

ドビュッシーの夢みるような〈アラバスク第1番〉に続いて、ブラームスのもの柔らかい光も絶妙な〈ワルツ〉…と、本日の定期でお聴きいただいている作曲家たちも、微笑みながら肩を寄せているような小品集。協奏曲とはまったく異なる、しかし同じ作曲家・同じピアニストの見つめた音風景は、きっと、コンサートの余韻の先へと扉をひらくことでしょう。

ちなみに、このブラームス時代のピアノを弾いた新アルバム、なんと、ふだん置かれている小山さんの自宅の居間にマイクを立てて録音したというから、驚き！窓の外の庭で鳥がなく声が入ってしまったテイクも、CDの最後に収められているのも素敵で、その親密な空気感も含めての、音楽です。

◆ブラームスと同時代から、いにしえと現代を往還したひと

さて、ブラームス時代の楽器と響きのお話を致しましたが、次回・第199回定期（7月9日）では、引き続きヨハネス・ブラームス（1833～1897）の作品をお楽しみいただくのはもちろん、彼が生きた時代を良く知る作曲家、ヴォーン・ウィリアムズの名作を併せて体感していただきます。

——英国の作曲家、レイフ・ヴォーン・ウィリアムズ（1872～1958）は、若い頃からブラームスを深く尊敬し、彼が亡くなった頃にドイツへ留学しています。そこで音楽の伝統と現在を深呼吸した若き作曲家（ちなみに〈ヴォーン・ウィリアムズ〉で姓です）は、その影響からさらに、新しい響きを開拓してゆきます。

彼は、ブラームスやワーグナー、昇龍の勢いで活躍していたリヒャルト・シュトラウスなど同時代の音楽を研究しつつも、イギリス各地の民謡をはじめ、古い英国音楽の豊かな音楽遺産にも目をひらきます。

さらに数年後、今度はフランスへわたってラヴェルに師事（まったく作風が異なる師弟ですが）。いよいよ作曲の腕を磨いた青年作曲家は、〈いま〉と〈遙かむかし〉を深く繋げてしまった奇跡的な名作を書き上げます。——それが、次回お聴きいただく《タリスの主題による幻想曲》（1910年）です。

16世紀イングランドの偉大な作曲家トマス・タリスの原曲から、自由に羽根を広げたファンタジーなのですが、響きの設計が実にユニークで、これはぜひ生演奏でお聴きいただきたい作品です。

二重の弦楽オーケストラがそれぞれ離れて配置され（しらかわホールステージでは、距離を取るのはいちよつと難しそうですが）、そこからときに弦楽四重奏も独立して奏されます。3群の合奏が呼び交わす立体的な響きは、まるで教会堂の豊かなエコーを思わせるようなサウンドをつくるのです。

《幻想曲》と題するだけに、タリスはあくまで発想の出発点。そこからヴォーン・ウィリアムズの《いま》の感性が素晴らしく細やかな音楽を大伽藍へと組み上げてゆき……「聖俗問わず英国の音楽的伝統の全てと共鳴しながら、永遠に新鮮で独創的」(J・デイ)な音楽が広がります。

初演時には「とても古い音楽を聴いているのか、非常に新しいものを聴いているのか、まったく分からない」という批評が出たそうで、いや、それこそ本作の醍醐味！

◆マエストロ藤岡ならではの選曲

次回定期で指揮台に立つ、熱血のマエストロ藤岡幸夫（関西フィルハーモニー管弦楽団首席指揮者）は、英国王立ノーザン音大で指揮を学び、デビュー期からイギリスでも大活躍を繰り返してきました。英国の誇る大作曲家ヴォーン・ウィリアムズの作品は、数々の交響曲をはじめ大の得意とするところです。

マエストロ藤岡だからこそ、ブラームス三昧の選曲にも（ブラームスの生きた時代を知る）ヴォーン・ウィリアムズを重ねる意味が、さらにしっかりと響くというわけです。

藤岡さんが次回定期で振られるブラームス作品は、まず《大学祝典序曲》（1880年）。ドイツで昔から歌われてきた学生歌のメロディあれこれを織りこんで、陽気で堂々たるオーケストラ曲に仕上げたという点で、昔と今を繋げた《タリスの主題による幻想曲》と通じるところも無くはないですね（印象は正反対ですが）。

そして、明るく楽しい《大学祝典序曲》と、対になるような作品を……と同時期に書かれた《悲劇的序曲》（1880年）。タイトルの通り、暗く劇的な重さが素晴らしい曲ですが、特にストーリーがあるわけではなく、悲愴な緊張感と起伏とが見事に彫り込まれてゆくもの。

この2つの対照的な序曲、併せて聴けるチャンスというのも意外に少ないもの。表と裏ではないですけど、人間ならば誰でも持っている両極が表現されているあたり、ブラームスの手練と円熟を一気に味わってしまえるわけです。

◆卓抜な仕掛けが、力あふれる音宇宙へ——交響曲第3番

そして、最後はブラームス4つの交響曲もいよいよ後半——交響曲第3番（1883年）です。

前回・第197回定期（6月24日）でお聴きいただいた、朗らかな交響曲第2番から6年後に生まれた人気作。もちろん理屈抜きで聴いても怒濤の迫力と豊かさに呑まれる音楽ですが、そこにブラームスがほどこした綿密な仕掛け、聴き手を自然に深みへいざなう手腕は、したたかなほどに巧みです。

たとえば、冒頭からいきなりあらわれる動機が、後にもたびたび効果的にあらわれたり、ほかのテーマにも織り込まれたり……と、知らず知らずに全曲を統一するにはたらいっています。

しかもその動機、実はブラームスが若い頃から座右の銘のように唱えていた "Frei aber froh"（自由に、しかし楽しく）、3語それぞれの頭文字を音名に読み替えてつくられたのでは……と言われていたり（こじつけではありますが）謎めいたあたりもまた一興。

その動機だけでなく、対照的な動機もしっかり登場（次回定期は〈対照〉もキーワードでしょうか）。鮮やかな対比も、単なる背中合わせではなく、豊かな立体感をもって絡み合っていたり……聴きこむごとに深まる音楽です。

そしてなにより、名旋律の美しいこと！情緒あふれる甘美なメロディは、ブラームス作品でも屈指のものではないかと思いますが、それらがすべて、終楽章の暗くもエネルギーに満ちたなかに突進してゆく迫力。……そして最後に、あの動機が還ってくる！

すべてが最後に大きな円環をつくるような音宇宙の凄みを、マエストロ藤岡と、ブラームスの旅路を着々と歩みゆくセントラル愛知交響楽団が、どのように描くのか。次回もこのホールでご堪能を！

やまのたけひろ 山野雄大

ライター [音楽・舞踊評論]。『レコード芸術』『バンドジャーナル』など雑誌・新聞への寄稿をはじめ、NHK・FM「オペラ・ファンタステイカ」他ラジオ・テレビ出演も。第一生命ホールでのコンサートシリーズ《雄大と行く 昼の音楽さんぽ》ナビゲーターを務めたほか、CDライナーノートや企画構成、オーケストラやバレエ公演の解説など多数。

Profile

